

スポーツ教室におけるトップアスリートの教師行動に関する研究

— トップアスリートを経営資源として捉えて —

The effect of teacher's behaviors on the sports lesson by a top athlete

: A top athlete is regarded as one of the resources on business

体育学部体育学科

田原 陽介

TAHARA, Yosuke

Department of Physical Education

Faculty of Physical Education

大東文化大学 スポーツ・健康科学部

佐藤真太郎

SATO, Shintarou

Daito Bunka University

体育学部体育学科

常浦 光希

TSUNEURA, Kouki

Department of Physical Education

Faculty of Physical Education

体育学部体育学科

山本 孔一

YAMAMOTO, Koichi

Department of Physical Education

Faculty of Physical Education

キーワード：トップアスリート, スポーツ教室, 教師行動

Abstract : First of all, that a top athlete is understood, and the fact what a top athlete is first doing in the sports lesson should be caught, and be understood as human resources overall and structurally about the strategy effectively very used for the society. Then the purpose of this study was to clarify what kind of a top athlete behavior as a teacher would be related deeply to the participant's evaluation for the sports lesson.

The main teacher's action (provided) by a top athlete in a sports lesson was divided roughly into five categories such as "management", "interaction", "instruction", "monitoring", and "supplementary activity of learning".

An top athlete's sports lesson was ranked as the same level of other actions such as "Study assistance activity", though it was reported that an teacher's action was categorized into four major types except for "Supplementary activity of study" in the class of the physical education of the elementary school.

The positive feed-back became the sports lesson with especially an especially high evaluation and corrective and negative feedback became little results a lot, and oppositely.

Keywords : top athlete, sports lesson, teacher behavior

I. 諸言

平成22年8月、文部科学省（2010）は今後我が国のスポーツ政策の基本的な方向を示す「スポーツ立国戦略」を策定した。平成12年9月に定めた「スポーツ振興基本計画」を下敷きに、新たなスポーツ文化の確立を目指して、する人、観る人、支える人を重視した国

民スポーツ振興のための5つの重点計画を掲げている。重点計画の「3. スポーツ界の連携・協働による好循環の創出」の目標として、総合型クラブへ引退後のトップアスリートを指導者として配置することや、学校体育や部活動へ人材の拡充を目指すことが示された。このことは、今後トップアスリート等の競技者が経営資源として社会に認識され、トップアスリートを

よりスポーツ教育現場へ指導者として活用する方向性を示していると考えられる。

しかし、このスポーツ立国戦略について斎藤(2011)は、「戦略の基本的な考えや基本理念、基本原則の側面から整理がされてない」ことや、「スポーツ政策の基本理念・基本原則に関する議論の低調さ」と指摘しており、それぞれの重点目標から実践レベルの施策に移行していくには、まだまだ議論すべきであろう。それゆえ、トップアスリートを積極的に経営資源として活用していくには慎重を期す必要がある。

このような、スポーツ現場にトップアスリートが立つことはこれまでも行われてきた。特に、プロスポーツチームにとって社会貢献のツールとして子どもに対するスポーツ教室は欠かせない事業であり、そこでの子ども達とのふれあいは、非日常の体験や子ども達に「夢や希望」を与えるといったプラスの効果が期待されている。

しかし、トップアスリートが教育現場にたち、直接子ども達へ指導する事に関してはその効果や子ども達の影響や、そもそも実際にスポーツ教室でどの

ような教師行動をしているのかということは未だ整理されていない。

そこで本研究は、トップアスリートによるスポーツ教室を対象に、スポーツ教室におけるトップアスリートの教師行動の構造を明らかにすることを目的とする。また、小学校教員の教師行動と比較することによりその特徴について明らかにする。これらのことにより、スポーツ教室でのトップアスリートの行動はどのような特徴があり、どのような成果が期待できるのか、その詳細な分析をするための基礎的資料となる。

Ⅱ. 研究方法

1. 対象

表1に示されたように、トップアスリートが小学生を対象としたスポーツ教室を分析対象とした。

2. 期日

スポーツ教室の観察は、2009年9月から2010年11月にかけて行われた。

3. アスリートの教師行動の観察法

スポーツ教室中の教師行動を1台のVTR及びワイアレスマイクで収録し、後に研究室で高橋ら(1989)が作成した「教師行動観察法」を用いて記述分析を行った(表2)。

表2が示すように、この観察法では教師行動が3次元で観察される。第1次元では、授業場面が観察され、生徒全体の学習活動の様態から、マネジメント場面か体育的場面かのいずれから決定される。

表1. トップアスリートによるスポーツ教室の概要

年.月	種目	参加数	講師
2009.7	短距離	64	世界大会出場者
2009.9	ハードル	66	日本選手権入賞者
2009.11	体操	45	オリンピックメダリスト
2010.2	幅跳び	55	日本選手権入賞者
2010.5	サッカー	70	元プロサッカー選手
2010.6	短距離	58	世界大会出場者
2010.9	ハードル	67	日本選手権入賞者
2010.11	体操	51	オリンピックメダリスト

表2. 教師行動の観察カテゴリー

次 元	カ	テ	ゴ	リ	ー
1. 授業場面	1) 体育的場面	2) マネージメント場面			
	1) 相互作用	a) 発問：①価格格 ②創意的 ③分析的 ④回顧的			
		b) 受理：①受理・受容 ②回答 ③傾聴			
		c) フィードバック：①肯定的(技能的, 認知的, 行動的)			
		②矯正的(技能的, 認知的, 行動的)			
		③否定的(技能的, 認知的, 行動的)			
		d) 励まし：①技能的 ②認知的 ③行動的			
		e) 補助的相互作用			
2. 教師行動	2) 直接的指導	a) 演説			
		b) 説明：①学習目標 ②学習内容 ③学習方法(組織化)			
		c) 指示：①指示 ②合図			
	3) 補助的活動	a) 補助 b) 運動参加 c) 審判・記録の伝達			
	4) 巡視				
	5) 維持・管理				
	6) 非機能				
3. 対象	1) 個人 2) 小集団 3) 全体				

さらに、その下位カテゴリーである具体的な学習場面が記録される。第2次元では、2つの授業場面における教師の言語的・非言語的行動の特性を観察するものである。主として相互作用、直接的指導、補助的活動、巡視、維持・管理、非機能のカテゴリー及びそれぞれの下位カテゴリーのいずれかに記録させる。第3次元では、教師行動が向けられる対象生徒が観察され、参加者全体、小集団、個人のいずれかのカテゴリーに記録される。

分析の方法は、3秒を1単位として、3秒間で起こった講師の言語的・非言語的行動をカテゴリーの定義や具体例に従って記述した。分析作業は3名で行ない、それぞれが全てのカテゴリーにおいて一致するよう訓練を行った上で作業に臨んだ。

Ⅲ. 結果と考察

1. スポーツ教室の教師行動の実態

表3は、スポーツ教室中のトップアスリートの教師行動について、8つの教室の平均値を示すとともに、比較対象として小学校体育授業の教師行動の平均値⁷⁾を示している。

〈トップアスリートのスポーツ教室における4大教師行動の確認〉

まず主要な教師行動に充てられた割合をみると、マネージメント場面は15.99%である。一方、体育的場面での直接的指導は29.01%、巡視10.35%、相互作用28.56%であり、これらの4つの行動で83.91%になる。高橋らのデータと比較してみると、小学校の体育授業での4大教師行動の割合は94.72%を占めている。今回の分析では、それらの4大教師行動に学習の補助的活動を加えると99.72%となるので、「マネージメント」「直接的指導」「巡視」「相互作用」の4大教師行動に加えて、「学習の補助的活動」を詳細に分析する。

シーデントップ(1988)の報告では、マネージメント17-35%、直接的指導14-37%、巡視20-45%、相互作用3-16%の範囲で4大教師行動を示している。しかし、本研究の結果では、マネージメント、直接的指導については彼の報告の範囲にあるが、相互作用と巡視については大きく報告されている値から外れている。高橋ら(1991)や岡沢ら(1995)の報告によると小学校、中学校の体育授業ではこのシーデントップの4大教師行動から成り立っているが、本研究で扱うスポーツ教室はそれらの構造とは異なる構造であることが考えられる。

次に下位カテゴリーについて分析すると、以下の点が注目できる。

〈マネージメント〉

マネージメントについて、ここではスポーツ教室に関わった準備や整理に充てられる活動場面や行動を意味する。これらが全体に占める割合は15.99%である。そこでの教師行動の大半は「維持・管理」2.40%、「説明」4.44%、「指示」3.11%、「巡視」2.44%であり、これらで12.39%となる。小学校での体育授業の教師行動と比較すると、全体量についてスポーツ教室の方が少ない割合となっている。

下位項目で両者の数値に着目すると、「指示」(スポーツ教室3.11%、小学校6.51%)、「巡視」(スポーツ教室2.44%、小学校6.38%)、「維持・管理」(スポーツ教室2.40%、小学校5.37%)の3つについて差がみられる。いずれもスポーツ教室の方が少ない割合となっているが、これには通常1名で行う小学校の体育授業に対して、スポーツ教室には講師をサポートする役割の人が多く存在することが関係しているだろう。スポーツ教室の講師はマネージメント活動よりも、体育的活動の方への役割が大きいため全体量が少ないのだと推察できる。

〈直接的指導〉

スポーツ教室での直接的指導が占める割合は29.01%である。これは小学校の体育授業の直接的指導の割合が21.29%であるため、スポーツ教室では直接的指導の割合が大きい。その内訳を見ると「演示」9.12%、「説明」8.00%、「指示」11.89%、となっており、指示について割合が大きい。

また、小学生の体育授業と比較すると、演示について1.29%なのに対してスポーツ教室では9.12%と大きな開きがある。さらに、「説明」についての下位項目に目を向けると、「学習の方法」に多くの時間を割いていた。

これには、トップアスリートが小学生に今まで行っていないであろう学習方法を提示したため説明の時間を長く取ったことと、それに伴い実際に運動の手本を見せたことにより割合が大きくなったと考えられる。

〈巡視〉

スポーツ教室での巡視の割合は10.35%である。小学校の体育授業と比較すると、巡視の割合は極端に少なかった。これは、直接的指導や学習の補助的活動、相互作用の時間に多く割かれたため、巡視の割合が減ったと考えてよい。

表3. トップアスリートのスポーツ教室と小学校体育授業における教師行動の構造

	スポーツ教室 (n=8) %	小学校 (n=66) %	差
マネージメント	15.99	27.04	-11.05
*発問	0.01	0.02	-0.01
*受理	0.15	0.12	0.03
*フィードバック	1.56	1.87	-0.31
肯定的	0.45	0.38	0.07
矯正的	0.45	0.97	-0.52
否定的	0.66	0.52	0.14
*励まし	0.22	0.39	-0.17
*補助的相互作用	1.33	2.28	-0.95
*演示	0.55	0.04	0.51
*説明	4.44	4.06	0.38
*指示	3.11	6.51	-3.40
*巡視	2.44	6.38	-3.94
*維持・管理	2.40	5.37	-2.97
相互作用	28.56	21.48	7.08
*発問	1.52	1.02	0.50
価値的	0.04	0.04	0.00
創意的	0.85	0.13	0.72
分析的	0.51	0.49	0.02
回顧的	0.12	0.37	-0.25
*受理	2.20	2.58	-0.38
受理・受容	0.33	0.89	-0.56
解答	0.44	0.26	0.18
傾聴	1.43	1.43	0.00
*フィードバック	16.40	9.02	7.38
肯定的	6.57	3.12	3.45
技能的	6.34	2.92	3.42
認知的	0.21	0.12	0.09
行動的	0.02	0.08	-0.06
矯正的	7.25	4.47	2.78
技能的	6.12	3.04	3.08
認知的	0.24	0.12	0.12
行動的	0.89	1.31	-0.42
否定的	2.58	1.49	1.09
技能的	2.33	0.95	1.38
認知的	0.02	0.05	-0.03
行動的	0.23	0.50	-0.27
*励まし	3.89	2.50	1.39
技能的	2.98	2.29	0.69
認知的	0.14	0.15	-0.01
行動的	0.77	0.07	0.70
*補助的相互作用	4.55	6.43	-1.88
直接的指導	29.01	21.29	7.72
*演示	9.12	1.29	7.83
*説明	8.00	6.12	1.88
学習の目標	0.44	0.33	0.11
学習の内容	1.33	3.26	-1.93
学習の方法	6.23	2.53	3.70
*指示	11.89	13.88	1.99
指示	9.11	11.67	-2.56
合図	2.78	2.21	0.57
*学習の補助的活動	15.81	2.85	12.96
補助的相互作用	1.02	1.29	-0.27
運動参加	14.34	0.25	14.09
審判・記録の伝達	0.45	1.31	-0.86
巡視	10.35	25.86	-15.51
悲機能	0.28	1.47	-1.19
個人	42.40	24.57	17.83
小集団	16.77	17.58	-0.81
クラス全体	40.84	57.85	-17.01

*小学校の値については高橋ら(1991)のデータを引用した

〈相互作用〉

スポーツ教室での相互作用は全時間の割合は28.56%で、小学校の体育授業との比較をすると割合は大きかった。特に、フィードバックについてはスポーツ教室16.40%、小学校の体育授業では9.02%となった。スポーツ教室の方が参加者に対して積極的にフィードバックをしていることが窺える。

〈学習の補助的活動〉

学習の補助的活動については、学習者（ここではスポーツ教室参加者）の活動を促進するための補助や運動参加、または審判等を行う活動のことである。

スポーツ教室での学習の補助的活動の割合は15.81%で、小学校の体育授業での割合は2.85%であり、スポーツ教室の方が大きい割合であった。

下位項目に目を向けると、運動参加についてスポーツ教室14.34%、小学校の体育授業は2.85%となっており大きな差が見られた。補助や審判・記録の伝達については大きな差は見られないことから、学習の補助活動の差は運動参加についての差であると考えられる。

〈教師行動が向けられる対象〉

スポーツ教室の教師行動が向けられる対象について見ると、「クラス全体に対する行動」が40.84%、「小集団に対する行動」16.77%、「個人に対する行動」42.40%となっている。

小学校の体育授業は、「クラス全体に対する行動」が57.85%、「小集団に対する行動」17.58%、「個人に対する行動」24.57%となっており、スポーツ教室の教師行動は個人を対象とした行動が多い。小集団に対する行動に対してほとんど差は見られないため、全体への行動の割合が個人を対象とした割合へ移行したことが考えられる。

以上の結果を総括すると、トップアスリートによるスポーツ教室では、特に「マネージメント」「直接的指導（演示、学習の方法）」「相互作用（フィードバック）」「学習の補助的活動（運動参加）」「対象次元」にその特徴がみられる。つまり、マネージメントの時間が少なく運動場面中心に行動し、スポーツ教室の雰囲気は参加者へ声掛けが多く、教師自ら積極的に運動参加をしてコミュニケーションをとっていた。さらに、技能に対してのフィードバックが多いことや、学習の方法について指導する時間が多く、参加者個人への行動も多かったため、技能を中心にスポーツ教室が展開されていたと言えよう。

IV. まとめ

トップアスリートを人的資源と捉え、社会へ有効活用していく方策について、まずスポーツ教室中にトップアスリートが何を行っているかという事実を総合的・構造的に理解する必要がある。さらに、どのようなトップアスリートの教師行動がスポーツ教室参加者の評価と深く関係するかを明らかにした。

その結果、次のような諸点が明らかとなった。

トップアスリートのスポーツ教室における主要な教師行動は、「マネージメント」「相互作用」「直接的指導」「巡視」「学習の補助活動」の5つに大別された。小学校、中学校の体育の教師行動研究では、「学習の補助的活動」が他の活動と比して少なかったため、これを除いて4大教師行動として名づけられていたが、本研究の結果では、他の4つの活動とほぼ同様に、学習の補助的活動にも大きな値が得られた。このような結果が得られたことから、「学習の補助的活動」も含めてトップアスリートの教師行動として理解する必要があると考える。

V. 課題

高度な競技スポーツに専念した彼らの経験は、スポーツ現場での思考様式や行動にどのような影響を及ぼすか、この点について検討していく必要がある。また、清水（2007）が「なぜ特定の行為を選んだか」「体育やスポーツ振興をどのように位置づけたのか」といったスポーツ経営の内側から解説する重要性を指摘しているが、トップアスリートのスポーツ教室の受け入れや開催する小学校や総合型地域スポーツクラブへ、その行為の意味を解説する研究が必要である。

文献

- 1) 文部科学省（2010）スポーツ立国戦略－スポーツコミュニティ・ニッポン－
- 2) 岡沢祥訓・大谷博記・中井隆司（1995）中学校体育授業における教師行動に関する研究－教師行動の構造と教材との関係－. 奈良教育大学紀要第44巻第1号：57-68.
- 3) 斎藤健司（2011）スポーツ立国戦略に関するスポーツ基本法立法の視覚からの提言－スポーツ政策形成過程におけるヒアリング制度の課題－. 筑波大学体育科学系紀要34：91-98.
- 4) シーデントップ：高橋健夫ほか訳（1988）体育の

教授技術. 大修館書店：東京, pp.74-76.

- 5) 清水紀宏 (2007) 体育・スポーツ経営学の方法論的検討－自己批判から再構築へ－, 体育スポーツ系家学研究21：3-14.
- 6) 高橋健夫 (2000) 子どもが評価する体育授業過程の特徴：授業過程の学習行動および指導行動と子どもによる授業評価との関係を中心にして, 体育学研究45：148-162.
- 7) 高橋健夫・岡沢祥訓・中井隆司 (1989) 教師の「相互作用」行動が児童の学習行動及び授業成果に及ぼす影響について, 体育学研究34：191-200.
- 8) 高橋健夫・岡沢祥訓・中井隆司・芳本真 (1991) 体育授業における教師行動に関する研究－教師行動の構造と児童の授業評価との関係－, 体育学研究36：193-208.
- 9) 高橋健夫ら (1994) 体育授業の「形成的評価法」作成の試み：子どもの授業評価の構造に着目して, 体育学研究39：29-37.
- 10) 弓削洋子 (2011) 教師の指導行動研究にみる2つの指導性機能間の関連, 愛知教育大学教育創造開発機構紀要vol.1：135-139.